

体を動かすことを楽しむ幼児を育てる ー保育内容「環境」の視点からー

伊藤 孝子

抄録：

平成26年度に文部科学省が実施した「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」結果から、幼児期にはいろいろな内容の体を動かす遊びが重要であり、小学校以降の体力総合評価に大きな影響を及ぼすことが明らかになった。

園生活においては、幼児が自己を十分に発揮して遊びや生活を楽しむ中で、体を動かす気持ちよさを感じたり、生活に必要な習慣や態度などを身に付けたりしていくことが大切である。体を動かすことを楽しむ幼児を育てるための環境や保育者の援助について、人的環境・物的環境・空間的環境の視点から事例をもとに検討した。

キーワード： 選択できる環境 自己決定力 自己肯定感

はじめに

平成29年3月に告示された、新しい幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、保育所保育指針（以下、幼稚園教育要領等）が本年度から全面実施された。

今回の改定で、幼稚園教育要領等の3歳児以上の「ねらい及び内容」等の整合が図られ、幼児教育から高校教育までをつなぐものの一つとして「育成を目指す資質・能力」が明確に示されたことの意味は大きい。すべての幼児教育施設で、3歳児以上の教育の部分は同じ「ねらい及び内容」で実施される。また、幼児の幼稚園修了時の具体的な姿であり、保育者が指導を行う際に考慮するものとして「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示され、幼児教育と小学校教育との接続をより一層円滑にすることが求められている。

幼稚園教育要領解説（平成30年3月）に示された、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の（1）健康な心と体には、「幼稚園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心

と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる」

「幼児は、幼稚園生活において、安定感をもって環境に関わり、自己を十分に発揮して遊びや生活を楽しむ中で、体を動かす気持ちよさを感じたり、生活に必要な習慣や態度を身に付けたりしていく。5歳児の後半には、こうした積み重ねを通して、充実感をもって自分のやりたいことに向かって、繰り返し挑戦したり諸感覚を働かせ体を思い切り使って活動したりするなど、心と体を十分に働かせ、遊びや生活に見通しをもって自立的に行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出す姿が見られるようになる」と記述されている。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」、領域「健康」のねらいに示されている「自ら健康で安全な生活をつくり出す」力は、人が生きるうえで根っことなる力である。生きる力の基礎を培う幼児期に「自己を十分に発揮して遊びや生活を楽しむ中で、体を動かす気持ちよさを感じ」る保育を大事にしたい。

1. 平成26年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果から

平成26年度に文部科学省が実施した「全国体力・運動能力、運動習慣等調査 報告書」によると、「幼少期の運動経験が体力・運動能力に及ぼす効果」として、次のような調査結果が出ている。

小学校入学前から運動が好きな児童は、きらいだった児童に比べ、運動時間が長く、体力合計点も高い傾向が見られた。

同様に、小学校入学前にいろいろな内容の運動を行った児童は、いつも同じ内容の運動を行った児童や、運動を行っていなかった児童に比べ、運動時間が長く、体力合計点も高い傾向がみられた。

また、現在、運動やスポーツをすることが好きかについて、「ややきらい」「きらい」と回答した児童にその理由を尋ねたところ、「小学校入学前から体を動かすことが苦手だったから」との理由が男子50.0％、女子59.9％と最も高かった。

この調査から、幼児期にはいろいろな内容の体を動かす遊びが重要であり、小学校以降の体力総合評価に大きな影響を及ぼすことがわかる。また、運動がきらいになるきっかけとしては、幼児期の体を動かすことへの苦手意識が大きく影響していることが窺える。

そこで、本学の子ども学科1年生保育士養成コースの学生に、体を動かすことに関するアンケートを実施し、運動やスポーツに対しての思いを調査した。

まず、体を動かすことが好きかきらいかを尋ねたところ、5人（15.2％）の学生がきらいだと答えた。

そして、きらいだと答えた学生に、幼少期のことを思い出してもらい、いつ頃まで体を動かすことが好きだったかを尋ねたところ、3歳頃1人、小学校低学年3人、高校生1人という結果であった。また、体を動かすことがきらいになった理由を尋ねたところ、表1のような結果であった。

表1：体を動かすことがきらいになった理由（複数回答可）

理由	人数（人）
体を動かすことよりも他にすきなことができたから	3
体を動かすことが、他の人よりも得意でないとわかったから	4
体を動かすことが面倒だと思うようになったから	3
思うように体を動かせなくなったから	0
その他	0

体を動かすことがきらいになる理由として、自我が芽生えてくると自分と他者との違いがわかり、自分よりも体を動かすことが得意な友達の存在や、体を動かすこと以上に自分の好きなこと、得意なことが見えてくるのだと考える。

運動やスポーツが得意か苦手かではなく、体を動かすことが好きな子どもを育てたい。

幼稚園教育要領解説にある「幼稚園生活において、安定感をもって環境に関わり、自己を十分に発揮して遊びや生活を楽しむ中で、体を動かす気持ちよさを感じたり、生活に必要な習慣や態度を身に付けたりしていく」ことは、幼児期に大切であり、生涯にわたる運動への意欲につながる可能性があることを、保育者は十分に知っておくことが必要である。

本稿では、園での生活において、幼児が「安定感をもって環境に関わり、自己を十分に発揮して遊びや生活を楽しむ中で、体を動かす気持ちよさを感じたり、生活に必要な習慣や態度を身に付けたりしていく」ための環境や保育者の援助について考察する。

2. 体を動かすことを楽しむ

0歳児の運動機能は、急速に発達する。発達には個人差があるものの、おおよそ生後3～4ヶ月で首がすわり、その後寝返りを打つ、支えなしで座る、ハイハイ、つかまり立ち、つたい歩き、そして、1歳頃になると一人で歩き始める。

0・1歳児の保育室を参観してよく目にするのは、どの子も体を動かすこと、体を動かせるようになることがうれしくて楽しくて、何度も挑戦する姿である。人は、古来より体を使って生活しており、歩いたり走ったり、獲物を獲ったり、植物を栽培したりして生きてきた。体を動かすことは、人間が生きていく本来の姿であると感じる。

事例1

1歳児 12月

保育室には、牛乳パックに布を貼って作ったはしご、0・1歳児がハイハイや歩いて上り下りできるように10センチメートル程度の滑らかな勾配をつけた坂道、アンパンマンをあしらったゴールの門などの保育者が手作りをした環境が用意されていた。1歳を過ぎ一人で歩けるようになったA児は、歩くことがうれしくてたまらない様子である。緩やかな勾配をつけた坂を、手でバランスを取りながら上り、ゆっくり坂を下る。その様子を隣で見守っている保育者から、笑顔で「Aちゃん、すごい」「Aちゃん、速いね」などと1回ずつ声を掛けられ、拍手してもらえることもうれしそうである。

それを見ていたB児も、A児をまねて同じように坂を上ったり下りたりした。

今度は、A児が横に倒したはしごをくぐり始めた。保育者がA児に声を掛けると、B児もはしごのところに行き、2人ではしごをくぐったり、その横を歩いたりして遊んでいた。

時には足が絡まって転んだり、よろけてしまつて友達やものとぶつかったりすることがあっても、

自分で動けること、歩けることがうれしくて何度も繰り返して遊ぶ幼児の姿があった。

事例2

2歳児 12月

冬の晴れた日、冷たい風の中でも幼児は元気に園庭で遊んでいる。

2歳になったC児は、園庭のすべり台で遊んでいた。すべり台を滑ることが楽しく、C児も含めて3人の幼児が、手すりを持ちながら階段を上っては滑り、上っては滑りを繰り返している。

給食の時間になり、保育者が、保育室に戻るように声を掛けていた。C児以外の2人は、保育者の言葉を聞いて保育室に戻っていったが、C児だけは、保育者が迎えに来てすべり台の一番高いところで「いや。いや」を言って、保育室に戻ろうとはしなかった。

保育者は、C児に声を掛けながら、すべり台で遊ぶ様子を見守った。C児は、他の幼児が保育室に入り保育者しかいない園庭で、何度もすべり台をすべった後、保育者といっしょに給食を食べるために保育室へ入っていった。

C児は、すべり台で遊ぶことが何よりも楽しかったのだろう。食べることよりも、もっと遊びたいと体を動かすことのほうを選択した幼児の姿を見て、幼児はこんなにも体を動かして遊ぶことが好きなのに、いつ頃から体を動かすこと、運動することを厭うようになるのか考えさせられた。

3. 体を動かすことを楽しむ幼児を育てる保育者の援助

幼稚園教育要領解説には、環境を通して行う教育の特質について、次のように示されている。

○環境を通して行う教育において、幼児が自ら心身を用いて対象に関わっていくことで、対象、対象との関わり方、さらに、対象と関わる自分自身

について学んでいく。幼児の関わりたいという意欲から発してこそ、環境との深い関わりが成り立つ。この意味では、幼児の主体性が何よりも大切にされなければならない。

○そのためには、幼児が自分から興味をもって、遊具や用具、素材についてふさわしい関わりができるように、遊具や用具、素材の種類、数量及び配置を考えることが必要である。このような環境の構成への取組により、幼児は積極性をもつようになり、活動の充実感や満足感が得られるようになる。幼児の周りに意味のある体験ができるような対象を配置することにより、幼児の関わりを通して、その対象の潜在的な学びの価値を引き出すことができる。その意味においては、テーブルや整理棚など生活に必要なものや遊具、自然環境、教師間の協力体制など幼稚園全体の教育環境が、幼児にふさわしいものとなっているかどうか検討されなければならない。

○環境との関わりを深め、幼児の学びを可能にするものが、教師の幼児との関わりである。教師の関わりは、基本的には間接的なものとしつつ、長い目では幼児期に幼児が学ぶべきことを学ぶことができるように援助していくことが重要である。また、幼児の意欲を大事にするには、幼児の遊びを大切に、やってみたいと思えるようにするとともに、試行錯誤を認め、時間を掛けて取り組めるようにすることも大切である。

○教師自身も環境の一部である。教師の動きや態度は幼児の安心感の源であり、幼児の視線は、教師の意図する、しないに関わらず、教師の姿に注がれていることが少なくない。物的環境の構成に取り組んでいる教師の姿や同じ仲間の姿があつてこそ、その物的環境への幼児の興味や関心が生み出される。教師がモデルとして物的環境への関わりを示すことで、充実した環境との関わりが生まれてくる。

保育環境を見直すうえで、保育者の役割は大きい。とりわけ、「幼児の周りに意味のある体験が

できるような対象を配置することにより、幼児の関わりを通して、その対象の潜在的な学びの価値を引き出すことができる」（下線部は筆者）環境を用意することは、保育者に求められる重要な役割である。保育者は環境の一部であり、「物的環境への関わりを示す」モデルであること、幼児にとって意味のある体験ができる保育環境を整えること、対象の潜在的な学びの価値を引き出すこと、幼児の遊ぶ姿から幼児といっしょに保育環境を作っていくことなどを、保育を見直す視点として常にもちたい。

そこで、上記の「環境を通して行う教育の特質と留意点」を踏まえ、「幼児が安定感をもって環境に関わり、自己を十分に発揮して遊びや生活を楽しむ中で、体を動かす気持ちよさを感じ」るための保育者の援助について、保育環境（人的環境、物的環境、空間的環境）の視点から考察したい。

（１）人的環境を豊かにする

前述の通り幼稚園教育要領解説には、「環境との関わりを深め、幼児の学びを可能にするものが、教師の幼児との関わりである。教師の関わりは、基本的には間接的なものとしつつ、長い目では幼児期に幼児が学ぶべきことを学ぶことができるように援助していくことが重要である」と述べられている。「教師の関わりは、基本的には間接的なもの」という点に留意したい。

内田（2014）は「プレイフルラーニング 幼児の「遊びと学び」プロジェクト 幼児期の“遊びの質”で将来が変わる ～子どもを伸ばす親の関わり方」で、子どもを伸ばす援助として、

- ①子どもに寄り添う。安全基地。
- ②その子自身の進歩を認め誉める。他者と比べない。
3H：ほめる・はげます・（視野を）ひろげる。
- ③「生き字引」のように余すところなく定義や回答を与えない。

- ④「裁判官」のように「判決」をくぐさない。
禁止や命令ではなく「提案」を。
〇〇しなさいでなく、選択の余地を残す。

と述べている。このことは、保育者の関わりでも大切にしたい留意点である。

保育者の幼児への関わりは、保育の質を左右する。保育者の賞賛が多い保育、3Hの多い保育者の学級・園ほど、幼児の姿は生き生きとしており、幼児の育ちは大きい。

事例3

2・3歳児 9月

こども園の園庭には、幼児が玉入れをして遊べるように、玉入れのかごと玉が準備してあった。

運動会は約1か月後で、運動会の練習としてではなく、自由な遊びの中で、運動会に向けて幼児の興味がシフトしていくように、環境が構成されている。

園庭に出ていた3歳児が、玉入れに興味を示し、かごを目がけて玉を投げていた。3歳児にとって、かごの位置は少し高く、かごにうまく玉が入らない。それでも4～5人の幼児がかごを目がけて、玉を投げ続けている。

D児も、友達といっしょに玉入れを楽しんでいた。その後、D児は何度も挑戦して疲れたのか、保育室に戻ってしまった。10分ほど経過したとき、D児が休憩を終えて、玉入れのところに戻ってきた。

「いっぱいや」とうれしそうに、近くにいた保育者に伝えた。保育者も笑顔で「いっぱい入ったね」と言うと、D児は玉を両手に2つずつ持って、かごを目がけて投げ始めた。両手に持つ玉の数を1つずつにしたり、かごに近づいて投げたり、いろいろ考えながら投げている。ときどきかごに玉が入ることがうれしい様子で、「先生、見てみ。いっぱい入ってる」と保育者に話している。

「Dちゃん、すごいな。いっぱい入れられたね」
「Dちゃん、今も入ったよ」と、保育者はほめた

り励ましたりして、D児は保育者からの言葉掛けもうれしそうに、その後も玉入れの遊びを続けていた。

3歳児が玉入れから次の遊びへと移り始めると、今度は2歳児も玉入れを始めた。玉入れを楽しんでいる3歳児の姿を見て、2歳児も同じように玉入れがしたくなったのだろう。2歳児にとって、かごの位置は3歳児よりも高く、投げる力も十分でないため、かごにまで玉が届かなかった。その姿を見ていた保育者は、2歳児が玉入れを楽しめるように考え、近くにあった三角コーンを逆さまに持ち、玉を入れられるようにした。2歳児は、お兄ちゃん、お姉ちゃんと同じように玉入れができたこと、三角コーンに玉を入れられたことや保育者にほめてもらえることが自信になって、玉入れを楽しんでいた。

幼児は、保育者にほめられ励まされて自信をもつ。D児が、玉入れに挑戦し続けることができたのも、少し難しい高さにあるかごに玉を入れられた喜びと保育者からほめられ、励まされたことによる自信からだと考える。そして、2歳児も同様である。保育者は、幼児のがんばる姿、熱中する姿を見つけ、タイムリーにほめたい。

事例4

3歳児 6月

活動名：保育者や友達といっしょに好きな遊びをしよう

初めての集団生活。入園当初は、新しい環境に慣れず、母親と離れることが不安で泣けてしまう幼児もいたが、2か月が過ぎ幼稚園生活にも少しずつ慣れ、保育者といっしょに身支度を整えたり、気になる友達といっしょに遊んだりする姿が見られるようになってきた。

保育室ではスライム、小麦粉粘土、テラスではシャボン玉などのいろいろな素材に幼児が触れ、感触を楽しめるように環境が構成されていた。保育室の隅にはカエルのお家があり、そこにはビニ

ルプールが置かれていた。そのビニルプールには、水の代わりにちぎった新聞紙がいっぱい入っていて、カエルになった幼児がプールで遊べる環境が用意してあった。

カエルになって、E児、F児の2人がプールで遊び始めた。最初は、新聞紙のプールの中で寝転がったり、水をすくうように新聞紙をすくって、上からパラパラと落としたりしていた。E児とF児は、カエルのお家に興味はあるものの、そこでどう遊んだらよいかイメージがもてていないようだった。

保育者がカエルになって、「いっしょにあそぼう」と、E児とF児に声を掛けた。2人は、保育者といっしょにカエルごっこができるのがうれしそうで、保育者に新聞紙の水をかけたり、新聞紙のプールで寝ころんだり、全身を使って遊びだした。保育者の「Eちゃん、いっぱい水をかけられたね」「Fちゃん、お水いっぱいすくえたね」「元気いっぱいのカエルさんだね」といった言葉掛けもうれしそうで、体の動きがさらに活発になっていく。その様子を見ていた周りの幼児もカエルごっこに参加し始めた。プールに入っていた新聞紙は保育室全体に散らばり、汗をいっぱいかいて上着を脱ぐ幼児もいた。幼児は、新聞紙を集めて思い切り上に投げたり、新聞紙をちぎって細かくしたりして思う存分遊ぶなど、全身を使っての運動遊びへと発展していった。

保育者は環境の一部であり、「物的環境への関わりを示す」モデルである。新聞紙のプールでどう遊んでよいか戸惑っていた幼児が、保育者の新聞紙への関わり方を見て、遊びを広げることができた。特に、3歳児では、対象物と初めて関わる幼児もいて、保育者のモデルとしての役割は重要である。

そして、「Aちゃんすごい」「Bちゃんかっこいい」も大切な言葉掛けではあるが、それだけではなく、「Aちゃん、〇〇ができてすごい」「〇〇できるようになったね」と、何が素晴らしいの

か、何をほめているのかを具体的に伝えることが必要である。具体的にほめられたことで、幼児はできるようになった自分に自信をもつことができる。保育者の3Hによる援助は、幼児の自己肯定感を育み、幼児を生き生きと大きく成長させることにつながる。

（２）物的環境を工夫する

①幼児が選択できる環境 自己決定の場をつくる

物的環境を工夫する際の留意点としても、内田の言う「〇〇しなさいでなく、選択の余地を残す」ことは大事である。

事例 5

4歳児 12月

活動名：忍者になっていろいろな修行に挑戦しよう

運動会以降、体を動かす遊びが盛り上がり、園庭では、氷鬼や高鬼などの鬼ごっこや転がしドッジボールなどの集団遊びを楽しむ幼児が多く見られる。友達がうんていや鉄棒などで遊んでいると、自分もできるようになりたいと友達に刺激を受けて挑戦する幼児もいる。

3歳児の時に忍者ごっこをして遊んだ経験がある幼児が、手裏剣や頭巾などを作って遊び始めたのをきっかけに、学級全員が忍者になって修行をすることになった。

保育者は、積み木、トンネルなどを使い、忍者が修行する環境を用意した。主な修行の場は次のようなものであった。

- ・ 一本橋を渡る
- ・ 的当てをする
- ・ 段ボールの穴に手裏剣や新聞紙爆弾を入れる
- ・ すべり台を下から上る
- ・ 太鼓橋の上を渡る
- ・ 跳び箱を上り降りる
- ・ 巧技台から跳ぶ
- ・ ソフト積み木を跳び移る

- ・ゴムの隙間をくぐる
- ・トンネルをはう
- ・鉄棒にぶら下がる
- ・休憩場所にはたこ焼き屋さんがあって、休憩する

投げる、当てる、歩く、渡る、上る、跳ぶ、はう、ぶら下がる、しゃがむなどの全身を使った様々な動きを考えて保育環境が整えてあった。鬼の的当てが楽しくて、何度も的当てに挑戦する子、一本橋を渡るのが気に入って、渡り方をいろいろと変えながら渡る子、修行に疲れてたこ焼きを食べに休憩場所に行き、少し休んだ後、再度修行に出かける子など、幼児は思い思いの遊びを楽しみ、1時間程度続いた修行があつという間に終わってしまった。

全員が同じ忍者の修行をする保育であつたが、修行の中身は幼児によって違う。幼児の興味、関心に応じた、幼児が選べる環境であつたことが、遊びに熱中できた要因だと感じた。

内田の言う「〇〇しなさいでなく、選択の余地を残す」こと、幼児がやりたいことを自分で選べる場、自己決定の場を用意することは、幼児の主体性を育むことにつながり、保育環境を構成するうえでも大事にしたい。

②幼児といっしょに環境を作る

この「忍者になっていろいろな修行に挑戦しよう」の保育の後、園内研究会がもたれた。その中で話題になったのが、幼児の挑戦したい気持ちを高める環境の再構成についてである。

平ゴムで作った蜘蛛の巣をくぐる修行があつた。平ゴムには鈴が付けてあり、体が平ゴムにさわると鈴が鳴って、蜘蛛の巣に触ったことがわかるように工夫していた。しかし、平ゴムの位置が、床から少し高いところにあり、幼児は簡単に蜘蛛の巣をくぐり抜けられることや、鈴の音が小さくて蜘蛛の巣に触っても鈴の音が聞こえにくいこともあり、蜘蛛の巣の修行をする幼児は時間の経過と

ともに減ってしまった。幼児の興味、関心を持続させるためには、この蜘蛛の巣の環境をどう変えるとよかったのか意見が出た。他の保育者から、「もう少し大きな音のする鈴が必要だと思う」「幼児といっしょに平ゴムを動かして、蜘蛛の巣を複雑にしてもよいのではないか」「鈴の位置を幼児と相談して変えた方がよい」など、幼児といっしょに環境を再構成していく意見が出た。

幼児は、挑戦してできるようになったことがうれしくて何度も同じ遊びを繰り返す。しかし、ある一定の満足感が得られると、少し難度の高い遊びや違う遊びに幼児の興味は移っていく。幼児が遊び続けるためには、幼児の内面に、「もっと遊びたい」「挑戦したい」「どうなるのだろう」「不思議だな」などの気持ちの高まりや感情の変化が必要である。そのためには、幼児の興味、関心に応じて、環境を変えていかなければならない。そのとき、幼児といっしょに環境を変えていく視点が必要である。保育者は、幼児が十分に遊んだ満足感、自己肯定感が育つように、幼児の思いを感じたり聞いたりしながら、幼児といっしょに環境を再構成していきたい。

(3) 空間的環境を整える

幼稚園教育要領解説の「環境を通して行う教育の特質」には、「幼児の周りに意味のある体験ができるような対象を配置することにより、幼児の関わりを通して、その対象の潜在的な学びの価値を引き出すことができる。その意味においては、テーブルや整理棚など生活に必要なものや遊具、自然環境、教師間の協力体制など幼稚園全体の教育環境が、幼児にふさわしいものとなっているかどうかとも検討されなければならない」と述べられている。園全体の環境が幼児にとって意味のある体験になるよう配慮することが大切である。

事例6

靴箱で下靴を脱いで保育室へと続く廊下に、い

ろいろな運動遊びができる環境を工夫している園がある。

市全体で運動遊びに取り組んでいる地域の園では、どの園を訪問しても、運動遊びが自然にできる環境が用意されている。

ある園では、3歳児クラスの廊下にタフロープでタンバリンをつり下げていた。タンバリンにはイチゴのショートケーキのイラストが貼ってあり、廊下を通るとき、幼児がジャンプしてタンバリンにタッチすると音が鳴る。3歳児は、廊下を通るとき、「ケーキにタッチできた」と、楽しそうにジャンプをしている。

また、廊下の隅には、年齢に応じてカラーマットや折りたたみ鉄棒、カラーコーン、室内用トンネルなどの教材が、幼児の安全に配慮して置いてある。必要になったときすぐに取り出して、遊びや生活の中で使えるように工夫されている。

他の園でも、けんけんばができる足形、くねくねのへびやジグザグの道を、ビニルテープなどを利用して廊下に作り、幼児が廊下を通ったときに自由に遊べるようにしている。幼児が、毎日の生活の中で、体を動かす楽しさを自然に感じることができるよう環境を整えている。

園庭や遊戯室などの広い場所に行かなくても、体を動かすことは簡単にできる。エントランスや廊下などのスペースを活用して、幼児が自然に体を動かしたくなるような環境を用意することも大事である。園全体で、園目標を達成するために何を大事にして保育をするかについて共有し、それぞれの年齢に応じた環境を工夫したい。

4. 考察

以上の事例を踏まえ、園での生活において、幼児が「安定感をもって環境に関わり、自己を十分に発揮して遊びや生活を楽しむ中で、体を動かす気持ちよさを感じたり、生活に必要な習慣や態度

を身に付けたりしていく」ための環境や保育者の援助について考察する。

幼児が体を動かす楽しさを感じるためには、「安定感をもって環境に関わり、自己を十分に発揮して遊びや生活を楽しむ」ことが前提にある。体を動かす気持ちよさに限らず、幼児が様々な遊びにじっくり取り組むようになるためには、保育者と信頼関係で結ばれ、園で安心して過ごせることが必要である。

白旗（2018）は、「『たくさん遊ぶ・いろいろ遊ぶ・いっしょに遊ぶ』を合言葉に、体を動かすことを楽しむ幼児の育成を目指していただけると幸いである」と述べている。この「たくさん遊ぶ・いろいろ遊ぶ・いっしょに遊ぶ」幼児を育成するためには、人的環境・物的環境・空間的環境に配慮することが求められる。

「たくさん遊ぶ」ためには、幼児が遊びに没頭できる環境が大事であり、保育者は、幼児がやってみたい、挑戦してみたいと思う環境を用意し、幼児にできたときのうれしさ、がんばった喜びを味わわせたい。そのためにも、保育者の3H（ほめる・はげます・（視野を）ひろげる）が大事である。「たくさん遊ぶ」ことは、幼児に充実感、満足感を与え、自己肯定感を育むことにつながる。

幼児が「いろいろ遊ぶ」ためには、幼児が選択できる環境を用意したり、幼児といっしょに環境を作ったりすることが大事である。事例5のように、投げる、当てる、歩く、渡る、上る、跳ぶ、はう、ぶら下がる、しゃがむなどの動きを考え、その遊びを通してどんな動きができるのか、どんな力が育つのかを考えて、物的環境を工夫したい。幼児が、自分で選んだ遊びをすることは、自己決定力の育成につながる。

そして、保育者や友達と「いっしょに遊ぶ」ことで、保育者や友達が対象物への関わり方のモデルになったり、刺激を受けたりして、幼児はより一層たくさん遊んだり、いろいろ遊んだりする。

毎日をどのように過ごすか選択できる環境の中で、幼児は自分のやりたいことを見つけ、環境と

かかわりながら遊びを広げていく。幼児期に体を動かす心地よさを感じ、体を動かすことが好きだという気持ちを育てることは、生涯にわたる運動への意欲につながる可能性があることを保育者は知り、体を動かすことを楽しむ幼児を育てたい。

おわりに

幼児教育は、教科書がなく総合的に行われるため、幼児に育っている力が客観的に見えにくく評価の視点も曖昧なところがあり、数値化することが難しい。また、幼稚園教育要領等では、ねらいと内容が示されているものの教材は園によって違い、活動内容は園や保育者に委ねられている。

園を訪問し、玄関や廊下に入らせていただくと、その園が何を大事に保育されているかが伝わってくる。自然や生き物との出会いやふれあいを大事にしている園、造形などの表現に力を入れている園、体を動かす環境を大事にしている園など様々である。

幼児教育は、環境を通して行われる。毎日空気のように幼児が吸収している環境を大事に保育したい。

協力園

長浜市立きのもと認定こども園
彦根市立高宮幼稚園
彦根市立平田こども園

<引用：参考文献>

- ・文部科学省『幼稚園教育要領解説』平成30年3月 フレーベル館 2018年
- ・文部科学省「平成26年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査 報告書」（平成26年11月）
- ・内田伸子 筑波大学監事・お茶の水女子大学名誉教授「プレイフルラーニング 幼児の『遊びと学び』プロジェクト 幼児期の“遊びの質”で将

来が変わる ～子どもを伸ばす親の関わり方」
(2014.1.27)

・文部科学省「幼児期運動指針 普及用パンフレット」2012年

・白旗和也 日本体育大学教授「体を動かすことを楽しむ幼児の育成に向けて」『初等教育資料』
(2018.9)

子ども学科講師